尾坂德司著「中國新文學運動史――政治と文學の交點・胡適から魯迅へ――」
東京　法政大學出版局　一九五七年一一月　三一二頁

戰後のめざましい變貌をとげた中國に對する關心のたかまりは、同時にその新しい文學についてもわたしたちの關心をよびおこしつつある。しかしながらそうした關心に對應してあらわれた中國新文學史に類する書物は案外にすくなく、王瑤著「中國新文學史稿」の譯書は別として、日本人の手によるものは、この著をあわせても三册ばかりでしかない。島田政雄著「中國新文學入門」（一九五二年八月、ハト書房）、菊地三郎著「中國現代文學史―革命と文學運動」（一九五三年十二月、青木書店）がそのうちの二つである。現代文學に關して斷片的・部分的にかかれたものは數えあげられないほど多いけれども、このように文學史としてまとめられたものがすくないのは、資料の嚴密を缺くために著作が困難であつたことにもよるであろう。そうした惡條件の中でともかく公けにされたこれら三つの著は、ともに隣國の文學を、自國文學の現在にひきくらべようという意圖のもとにかかれており、從つて、政治のあり方に隨伴して近代中國をつくりあげた文學史という觀方では一致する。ただ、三者の扱う範圍は少しずつちがつているし、それらの立場や態度も又相當のひらきを示している。「中國新文學入門」は、新中國の成立という時點から性急にその效用をおしつけようとする粗雜な敍述によつて、文學を革命の成功に結びつけるだけの一方的なものであつた。當時の文學について正確なデーターを求めようとすれば、この書は失望させる。新中國に對するまばゆさが、その經過を展望する場合に著者を近視眼的にした典型といえるであろう。「中國現代文學史」は、副題にも示す通り「革命と文學運動」であつて、抗日戰爭後半期から內戰期の八年間（一九四二～四九年）にしぼられている。この期間に限つたことは、更に非常な困難を意味する。中國全土が大戰爭のるつぼであつた時期については、中國自身でも資料の整備に長時間を要する仕事である。それを、ともかくまとめようとする

著者の仕事は機械的に過ぎたようであり、しかも、一つの「ものさし」――文藝講話による規定は、整理ばかりが行きとどいていて、作品そのものの分析にとぼしい恨みを殘している。本書「中國新文學運動史」にいたつて、ようやくその歷史と內容を事實として追求し、分析することにおちつき、その上での著者の發言がうかがえるようになつた。これも單なる「文學史」でなく「文學運動史」であり、政治と文學とを離れがたいものとして說いているが、その動機が著者自身の文學研究における反省と願望にもとずいていて、文學運動の流れを具體的に解いてみようという意圖がうかがえる、その限りで、からませた作品分析はくわしいし、また資料もよく集められている。扱う範圍が十九世紀中葉に始まつているのも一つの特色であろう。

「私がこの本に書こうとしているものは、しかし、この中國新文學の分析ではなくて、そのような文學がどのような經過をたどつて生れてきたかである。問題が「經過」であるから、便宜的に、またこの方が讀者に親しみをおぼえさせるだろうと考えて、主要な作家をからみ合せて、流れに斷層がないようにと考えた。」

經過をたどるために、著者がその新文學の基盤として、アヘン戰爭以後の近代化コースを說いたのは、必要且つ十分な論述といつてよいであろう。近代中國の特殊性、その姿を知らずに新文學を語るのは獨斷を生みやすい。特に、魯迅や胡適など、新文學の先覺者の生い立ちがどんな方向を生み出していくかまでにいたつてはじめて、わたしたちは中國のきびしい文學的風土を知る。現在はいうまでもなく、過去の歷史においても中國の文學は、自國の政治的社會的運命に、つねに敏感であつた。文學運動史にとつては尙更、この歷史的背景・政治的側面を語る方法は大切であると思う。そうしたぼう大な內容を包含する爲に、この著が、魯迅の死までに止まつているのは、第一部として止むをえないであろう。

「わたしたちは、中國現代史の資料を手にするごとに、そこにおける民衆のあまりにも深い苦しみ、あまりにもはげしい受難、そしてそれにもめげずに起ちあがつていく人民の抵抗におどろかされる。さらに、この現代史の最新の部分にふみいるにつれて、人民の力というものが、正しく組織されたときに、どんなに巨大なものに變つていくかを、ひしひしと感じさせられる。」

これは、岩村三千夫・野原四郎共著「中國現代史」（岩波

書店新書版）のまえがきにみえる言葉である。わたしたちは、六億の人口をもつ隣國がどんなにひどい歴史を經てきたかを、戰後十年ばかりの間に、少しずつ知るようになつた。そのひどい歴史の形成において、他ならぬわが國の果した役割は事實としてつぐないきれぬまでの深いあくどい爪あととしてふりかえられている。歳月がたち、立場は變つた。わたしたちの前に示されているこの過去百年にわたる中國の歴史は、學ぶべき多くの事柄を孕んでいるであろう。そのゆえに、常に先達的な役目を果した文學運動について、文學史について、著者が語ろうとしたことはうなずけるように思う。

あとがきにも示されているが、著者は「讀物」的でありたいとさえ意圖されたようである。それはこの著の第一章、いわば著者の「前白」――郭沫若「波」中國文學への誘い――にはつきりうかがえる。「かつての悲慘であり、うめき聲にみちていた中國の文學」を知り、語ることによつて、わが國の現狀――日本全體のあり方、あるいは日本の文學のあり方に對する、問題提起として讀まれたいという希望とうけとれる。

「中國はかつて悲慘でした。だから最近のものを除いて、中國文學にはうめき聲がみちております、日本には中國のこの種の悲慘事はありませんでした。だから現に砂川のような悲慘事にぶつかりながらも、關心をもつ者は少なく、それを作品に再現する者も少ない。私は日本人に、日本の現狀を知る鏡として中國文學をおすすめしたい。この本が、中國文學に多少でも關心をもつ人びとの手引きとなれば幸いだと思います」

著者の意圖は大かた果されていると私は思う。ただ、中國新文學のような文學は著者の望むような形でわが國に生れないであろうが。中國新文學運動史が、資料的にくわしく語られた點に、敬意と感謝をのべつつ、以下二・三の點について、感じたことを記してみたい。

1、文學革命の意義について。文學革命はまず胡適の言語改革提唱に始まるのだが、この著での胡適の評價は必らずしも十分でないように感じられる。「中國新文學入門」では、胡適について、ほとんどふれていないほどの亂暴さがあつたが、この著は相當くわしくふれながら評價にはけちん坊的である。同盟會の人びとの自傳には、胡適からう

けた影響の大きさが記されているという。決定的な瞬間において、反動の側に立つたことでもつて、評價を一色にしてしまうには、初期の仕事はやはり大きい。政治と文學を二つの軸とするならば、魯迅と胡適は異つた方向にのびる二つの線であるという工合にとらえようとして、そのちがいを際立たせるために、胡適の果した役割をマイナスの面で强調しすぎたのではあるまいか。

2、古典と新文學の關係について。魯迅の一生を通じての、古典に對する造詣の深さについて、（例えば、「中國小說史略」「唐宋傳奇集」など）著者は極く少ししかふれていない。それも消極的な切り拔け策、あるいは弱い抵抗の姿勢としてである。それが眞實の姿であつたとしても、大きく語らねばならない要素なのではないかと思う。新文學運動は、封建禮教の廢止主張であり、古典的規範の否定であつた。したがつて、表にあらわれたのは、古典への反目でさえあつた。しかしながら、文學者たちは諸外國の文學に意欲的にふれると同時に、自國の古典についても無關心ではありえなかつた。ふるい殘滓を克服するためにも古典そのものは勉强されなければならぬ、意識の內にあつたかなかつたかは別として、わたしたちをおどろかせるのは、彼らをもつとも深く支えたのが、他ならぬこの自國の古典に對する、ゆるぎない造詣の深さであつたという點である。あつけなくついえさつた新月派とその末流の詩文作品にくらべても、それらの作品は大きな息の長さを示している。更に郭沫若・茅盾、などもそのよい例であろう。新文學運動推進のバックボーンは、むしろそのスローガンの逆說的な內容にえていたのであつた。文學運動の主張が、むしろこうした論及されない土台の上に開花したという點、見逃してはならないことに思われる。

3、群小作家・胡適と魯迅の次代を用意する作家群について。彼らの動きを丹念にとらえようとした點はかなりの仕事であつたと思う。しかし流れに斷層がないようにという意圖は、いささか敍述を前後させ、ゴタゴタした感じにしたようである。ただ、魯迅と胡適という新文學運動の旗手を兩極において、その間を埋めているのが多數の作家であるという捉え方は面白く、運動の發展と作家群の動向を

多層的にといているのも無理がなくてよいと思う。

その他、今日ではともにすぐれた文學者として、新中國の陣營を形成している人びとがこれらの歴史の中で、魯迅と郭沫若の關係の如く、時にはげしい論敵であつたり、又はある時期の茅盾が、時の動きから孤立していたりした樣子も、かなりくわしくかかれているので、複雜な道程を知るのにもよい手がかりを與えるであろう。處々の原文と譯文の引用は、最低の要求をみたしてくれるが、なお欲をいうならば、各引用文には全部原文をつけてほしかつたし、更に參考した中國及び日本の文獻を明示されたかつた。

4、新文學運動の系統と作品、年表について。この著は左翼作家連盟の成立期一九三〇年頃までしかのべられていない。したがつておそらく魯迅以後にも語るべき多くのことを殘しているにちがいないと思われる。わたしたちも、今日にいたる新文學史を熱望しているし、とりわけ現在の狀態について、わたしたち隣國人の見解も、發表する義務をもつていると考える。續篇がまたれるわけであるが、その場合、この複雜多樣な內容をもつ文學史を、できるだけくわしい表にまとめてほしいと希望する。

5、誤植について。大へんに誤植が多い。今後もあることだから校正は徹底を期してほしいものである。又「讀物」として一般の人びとにふれることが多いのだから、「辭つた」という使い方にはルビがほしいし「君臨する」という言葉がうける助詞は「……に君臨する」の如く「に」であつて「文壇を君臨する」の如く「を」ではないなどといつたことにも注意がのぞましいと思う。

中國新文學研究は始まつたばかりである。研究態度や方法について、わたしたちは、今後多くのことを學ばなければならないであろう。著者は「中國新文學史稿」の著者王瑤氏の分析に一部の疑問を殘している。これは又、中國で出されている文獻について問題とされる機會があろうから省略するとして、日本人としての、中國新文學史に對する一解釋という意味で「中國新文學運動史」第一部は、興味ある讀物であり、わたしたちにとつても、一つの道標となるであろう。

（京都大學　島田久美子）